

漢語「不便」の使用環境と意味変化 に関する史的考察

張 潔

1. はじめに

「不便」は古代中国語由来の漢語であり、日本語に受容された当時は中国語の意味がそのまま踏襲され、上代の漢文資料では「便宜にあらず、不都合」という意味で捉えられたが、受容後の長年にわたる定着の過程において、時代ごとに意味・用法上の異同が多く見られる。和文資料を調査した結果、平安時代以降は主として「不都合」という意味であるが、相手が「困る」状態、事態が「けしからん」を表す用例も見られる。中世では、「かわいそうなこと・気の毒なこと」「かわいいと思うこと・かわいいがる」を表すようになり、近世以降になると、表記が変化し、「便利でないこと」という意味を表す場合は「不便」が用いられ、「かわいそう」という意味を表す場合は当て字「不憫・不愍」などが用いられるようになってきた。本稿では、古代中国語における「不便」の用法および日本語に受容された当時の意味を確認した上で、主として意味変化が生じた中古・中世の文献から具体的な文脈とともに、意味変化の環境を考察したいと思う。また、意味変化が生じる環境としては、文体との関わりが大きいと考えられるので、漢文体と和文体に分け、時代ごとにそれぞれの具体的な文体・文脈を取り上げ、意味変化の要因を考察したい。

2. 中国語における「不便」の使用環境

張(2015)によると、中国語における「不便」の意味は、主に「不利」「不便」「不熟練」「不馴染み」「不自由」「…に至らない」「お金がない」になるが、その用法は時代とともにそれほど拡大することがなかった。むしろ、特殊用法を除くと、基本的な用法「不利」「不便」から「不便」に縮小してきた。中国語の歴史的な変化の一つは、単音節語から多音節語への移行である。古代中国語の語は単音節で成り立っている〈単音節語〉を基本とするが、現代語では二音節や三音節など、いわゆる〈多音節語〉がほとんどである。“方便”の否定として“不便”が用いられる場合が多くなり、“不便”が専ら“不方便”を表すようになってきたのではないかと推測できる。こうして、「不利」を表す用法も徐々に少なくな

った。また、“不便”は「風土」に「馴染まない」と解釈でき、体が不便な時は「体が不自由」と解釈でき、お金が不便な時は「懐具合がよくない、お金がない」と解釈できる。このようにして「不便」「不利」の本来の意味項目以外の特殊用法も生じることになる。

3. 日本語における「不便」の使用環境

3.1. 日本語における「便」と「不便」との関係

ここでは、古典日本語における「便」(びん)と「不便」(ふびん)の関係について検討したいと思う。

「便」(びん)の意味については、『日本国語大辞典』(第二版)によると、古代から現代まで受け継がれてきた意味として「都合のよい機会」が挙げられる。また、「びんなし」「びんよし」「びんあし」など熟語としても用いられる。岡山県などの方言にもこの用法が残されている。また、「郵便。手紙。音信。ある地からある地への交通、運輸の手段」の意味もあり、この意味から「船便・速達便」のような接尾辞的用法が生じた。

また、『日本古典対照分類語彙表』によると、17¹⁾作品のうち、『徒然草』に4例、『宇治拾遺物語』に7例、『大鏡』に14例、『更級日記』に1例、『源氏物語』に47例、『枕草子』に5例、『蜻蛉日記』に10例、計7作品に88例が見られる。これに対して、「不便」は17作品のうち、『徒然草』に3例、『平家物語』に9例、『宇治拾遺物語』に10例、『大鏡』に10例、『源氏物語』に8例、『枕草子』に2例、計6作品に42例が見られる。このことから、「便」と「不便」いずれも古典日本語によく使われる語であると考えられる。

「便」(びん)と「不便」(ふびん)はいずれも漢語であり、古代中国語から借用した語と考えられ、「びんあし」「びんなし」のような熟語で「不都合」を表すことから、「便」が受容されてから、その否定を表す語として「不便」が作られたとは考えにくい。むしろ「便」と「不便」と別々に古典日本語に受容されたのではないかと考えられる。

3.2. 漢文体と和文体における「不便」の調査資料

「不便」の使用環境を漢文体(変体漢文、記録文なども含む)と和文体に大別し、それぞれにおける使用状況を分析してみたい。資料については、主として底本重視の観点から言語学的な価値が高い日本古典文学大系データベースを利用する。ただし、日本古典文学大系データベースにおける漢文体資料が少ないため、東京大学史料編纂所の古文書データベースの作品も調査対象に含めた。

漢文体と和文体の用例数を考慮し、作品リストを作り、表1のようにまとめることができる。

表 1 「不便」の作品リスト

文体	漢文体			和文体			
時代	資料名	時代	用例数	資料名	時代	用例数	
上代	播磨国風土記	715	1				
	常陸国風土記	718	1				
	日本書紀	720	5				
	大日本古文書	702-780	26				
	小計		33				
中古	菅家文草 菅家後集 詩編	900	4	宇津保物語	970	14	
	小右記	978-1032	97	落窪物語	990	3	
	御堂関白記	998-1021	6	源氏物語	1008	9	
					枕草子	1001	2
					今昔物語集	1120	15
					栄花物語	1034	8
					浜松中納言物語	1170	1
					夜の寝覚	平安後期	4
					狭衣物語	1068	2
	妻鏡	1226-1312	1				
小計		107			59		
中世	吾妻鏡	1300	39	宇治拾遺物語	1221	10	
				徒然草	1330	3	
				保元物語	1222	2	
				平治物語	1255	4	
				平家物語	1240	10	
				太平記	1378	5	
				沙石集	1283	12	
				増鏡	1376	1	
	曾我物語	1285	19				
小計		39			66		

次に作品を時代毎に整理し、分析する。

3.3. 上代の漢文体における「不便」

(1) 以所部遠隔 往來不便 分置多珂石城二郡 『常陸国風土記』

底本には、「便」の左上に「レ」があるので、「便」を読んだ後、一つ上の文字を読むということになる。「往來便(ゆききたより)よからざる」のように「便」は「たより」、「不」は「ざる」と読まれ、「不」と「便」は一語でないことが分かる。

(2) 丁亥、高市皇子遣使於桑名郡家以奏言、遠居御所、行政不便。宜御近處。『日本書紀』

『日本書紀』に用いられる5例はいずれも「もやもやあらず」と読む。「不」は「ず」と読まれることから、「不便」は一語ではなく、文否定の用法だと考えられる。

(3) 年伍拾漆歳、左足不便、殘疾、頸黒子 『大日本古文書』(天平5年)

例3から古代中国語での用法、つまり「不便」が「体(左足)」に用いられる用法が上代から見られることが分かる。

上代の資料を調査した結果、表2のようにまとめることができる。

表2 上代における「不便」の使用状況

	播磨国風土記	常陸国風土記	日本書紀	大日本古文書	合計
不利				4	4
不都合	1	1	5	18	25
不自由				4	4
合計	1	1	5	26	33

表2から分かるように、合計33例のうち、「不都合」を表す用例は18例で最も多く、「不利」「不自由」はそれぞれ4例ある。意味用法が古代中国語での意味用法の領域に収まることが明らかである。

3.4. 中古における「不便」の使用環境

3.4.1. 和漢混淆文体

(4) 大外記文義云、依有疑事、以大間可決、仍參内府申出見之、尻」付所々塗墨、そくらハし氣也者。召前被見る、不可多見、太不便也者

『小右記』(長元四年二月十七日)

(5) 左少史国宣奉筭文「文書数、如例」国宣進退作法太不便也、大弁教正。

『小右記』(長元四年三月十四日)

左少史国宣が上卿実資の前に筭文を奉った時の作法がみつともなかった。これを左大弁重尹が注意して直した。

上記の変体漢文体における「不便」の使用状況を表3にまとめることができる。

表3『小右記』『御堂関白記』における「不便」の使用環境

見出し	意味	数量	比率
極不便	極めて不都合	31	30.10%
極不便事	極めて不都合な事	20	19.42%
極可不便	極めて便ならずべき	6	5.83%
極可不便事	極めて便ならずべき事	1	0.97%
太不便	はなはだ不都合	32	31.07%
太可不便	はなはだ不都合であるべき	1	0.97%
太不便事	はなはだ不都合であるべき事	2	1.94%
甚不便	はなはだ不都合	7	6.80%
甚不便事	はなはだ不都合の事	3	2.91%
合計		103	100.00%

表3が示している103例はすべて「不都合」と解釈でき、上代における意味領域を超えていないことが分かる。興味深いことは「不便」の前における程度副詞「極めて」「甚」「太」の多用である。これは中古漢文体における新しい用法である。また、使用領域も拡大し、人の作法にも「不便」が用いられ、具体的な文脈では「みっともない」という意味に捉えられる。

3.4.2. 和文体

- (6) 少將「知らず、此の左大將殿ノ饗應にまキりて侍りしに、宮の土器とり給ヒて、いみじく強ヒ給ヒしかば、期醉)ひにける名残にや侍」「いと不便なる事かな。すべて、この御酒聞し召し過ぐる事こそ、いとあしきことナレ」

『うつほ物語』嵯峨の院

- (7) 美濃なる所の券と帶一つとゞめつる、むげに然しおき給けん御心ばへのかひなきやうなれば」となんの給へば、越前守、「いと不便なる事。身づからしおき侍らぬ事なりとも、殿にのみなんしろしめすべき。いはんや更に我がかくしおくなどいひおき侍りしにたがひては。

『落窪物語』

- (8) 「あやしく、「様の物」と、かしこにてしも、うせ給ひけること。昨日も、いと、ふびんに侍りしかな。川近き所にて、水を覗き給ひて、いみじく、泣き給ひき。上にのぼり給ひて、柱に書きつけ給ひし、

『源氏物語』手習

- (9) 御使にて、式部の丞信經まゐりたり。例のごと褥さし出でたるを、つねよりも遠くおしやりてゐたれば、「誰が料ぞ」といへば、わらひて、「かかる雨にのぼり侍らば、足がたつきて、いとふびんにきたなくなり侍りなん」といへば、「など。せんぞく料にこそはな

『枕草子』一〇三

- (10) 此ノ病人ハ、助クル人モ无カメリ。構テ、此レニ物令食テ、夕方参ラム。且ツ参テ、今参ル由ヲ奏ヘ」シ給ト。藏人ノ云ク、「此レ、極テ不便ノ事也。宣旨ニ随テ参給タラバ

『今昔物語集』神名睿實持経者語第卅五

上記中古の作品における「不便」の意味は「便ならず」「具合が悪い」「困る」などと解釈でき、「不都合」という意味項目に統一することが可能である。『宇津保物語』『落窪物語』『源氏物語』『枕草子』『今昔物語集』『栄花物語』『浜松物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』『妻鏡』計 10 作品、59 例について、前接語²⁾、後接語³⁾、内容、発話主題などの項目を設定しまとめて分析する。

前接語

「いと」が多用されている。59 例の内、39 例には「いと」が前接されている。「いと」は「程度のはなはだしいさま。事態が並々でない、常態以上の程度に出ることへの詠嘆、強調」を表し、「あまりにも、本当に、まったく」などの意を表す。「不都合」「困る」の程度を強調する語である。「いと」は当時の漢文体で「極めて」と対応する和文表現であり、漢文からの影響が窺える。また「極めて」は 6 例あるが、『今昔物語集』の文体を考えると、漢文体から直接に借用した語であると推測できる。また、「不便」の前に副詞が無い場合は 8 例しかない。

後接語

直接「なり」およびその活用・待遇表現（敬語形式など）で結句する場合がほとんどである。「不便なる事」は多くの場合、発話主体にも使われ、聞き手にも使われる。また、自分および相手にとっては「不都合なこと、困ったこと」を表す。「不便の事」「不便に思う」のような形式も見られるが、比較的少なく、意味の変化もみられない。

会話文

59 例のうち、56 例は会話文に用いられ、残りの 3 例は心話文である。発話主体は主に貴族男性であり、相手の地位や身分に大きな差異が見られない。当時の貴族男性は漢文の素養もあり、漢文から「不便」を借用し用いたことも推測できる。

意味

文脈により「便ならず」「困る」「けしからん」「いけない」などと解釈できるが、基本義として「不都合」に統一することに問題はない。事態や相手の状態に対しての客観的な評価であり、相手への同情や相手を可愛く思う気持ちはまだ見られない。

3.5. 中世における「不便」の使用環境

3.5.1. 和漢混淆文体

(11) 但今雖令改易其職、自神官、令還補本人者、甚以可爲不便之沙汰也。

『吾妻鏡』（文治二年（1186）六月二十九日）

文治2年、4年、5年の10例だけを考察対象とする。「不便」はほとんど「不都合」の意味である。

表4『吾妻鏡』における「不便」の使用

見出し	意味	用例数
返す返す不便	返す返す不都合・困る	2
尤も以て不便	まことに不都合・いけない	4
人の為に不便	人々の不都合	1
甚だ以て不便	甚だ不都合	1
尤も不便	まことに不都合	2
合計		10

時代は下り中世に至ったにも関わらず、変体漢文体作品『吾妻鏡』では「不便」の用法が中古漢文体での用法とほぼ同じであることが表4から分かる。

3.5.2. 和文体

(12) 是も今は昔、業遠朝臣死ぬる時、御堂の入道殿おほせられけるは、「いひ置くべきことあらんかし。不便の事也」とて、

『宇治拾遺物語』（業遠朝臣蘇生事 卷四ノ九）

(13) 犬はいよいよ不便にせさせ給けるとなん。

『宇治拾遺物語』（御堂關白御犬晴明等奇特の事 卷一四ノ一〇）

上記例(12)(13)のように、中世の和文体では「不便」の意味が大きく変化し、「不都合」という意味もまだ見られるが、「かわいそう」「かわいがる」の用例が多くなってき

た。中世の文学作品『宇治拾遺物語』『徒然草』『保元物語』『平治物語』『平家物語』『太平記』『沙石集』『増鏡』『曾我物語』計 9 作品、65 例について具体的に前接語、後接語、表現環境、意味に分けて分析してみたい。

前接語

中古と比べて、明らかな特徴は前接副詞の消滅である。65 例のうち、「いと」はわずか 4 例しかない。係り結びの「こそ」「ぞ」は 8 例あるが、最も多いのは前接副詞の省略であり、47 例もある。前代の漢文体や和文体の副詞「極めて」「いと」に縛られず、「不便」がより自由に使われるようになったことが分かる。前接副詞ではなく、直接「不便」の主語が来る場合も見られる。「事」「人」などが用いられ、主語そのものが「かわいそう・気の毒」だと解釈できる。

後接語

直接「なり」およびその活用・待遇表現（敬語形式など）で結句する場合は相変わらず多く見られるが、「不便に思う」「不便にする」の形式およびその待遇表現が多くなってきた。このような形式により話者の主観的な考え、自分の感情、同情心が現れ、「不都合」から「かわいそう」という意味変化がほとんどの場合において観察される。また「不便」も自由に変形でき、「不便さ」という名詞形式が 2 例見られる。「不便のこと・わざ・物・者」などの形も見られ、後接語が多様多様になってきたことが分かる。

会話文

中古では会話文中心である一方、中世に入り、心話文での使用が多くなり、地の文でも多用されるようになってきた。65 例のうち、20 例が地の文、7 例が心話文に用いられる。形式が多様になるとともに、会話文専用から他の環境にも自由に使われるようになった。話者の位相にも関わりなく、さまざまな登場人物が「不便」を用いることができるようになってきた。

意味

文脈により「具合が悪い」「かわいそう」「気の毒」「かわいらしい」「かわいがる」などと解釈できるが、基本義の「不都合」に統一できるのは 4 例しかなく、他は転義の「かわいそう」に統一することができる。この時代には、事態や相手の状態に対しての客観的な評価より、相手への同情や相手を可愛く思う気持ちを表す時「不便」が用いられたことが分かる。

4. まとめと今後の課題

「不便」の使用環境から、上代では、漢文体に用いられ、一語としては認められず、「不」は「便」の否定を表した。中古に入り、和文体では主に男性の会話に使われ、意味は主として「不都合」と解釈できるが、中世に入り「かわいそう」が主要な意味になってきた。「不都合」がほとんど見られなくなる。一方、漢文体では基本義「不都合」がすべての時代を通じて維持されてきた。

本稿の内容を今後の課題を含め以下のように要約することができる。

① 「不便」の意味変化と文体との関係が緊密であること

漢文体および変体漢文体では中国語の意味をそのまま受け入れ、基本義が長い間そのまま維持された一方、和文体では変体漢文体での微妙なニュアンスを受けて、大きな意味変化を遂げた。

漢文体→	変体漢文→	和文体
(基本義)	(基本義+表現環境の変更+意味領域の拡大)	(意味変化)

② 変体漢文体は新しい意味を生む土壌であること

『小右記』における「不便」の意味はほぼ古代中国語での意味を継承したが、「不便」が用いられる対象は人のみでなく、動作にも「不便」が使われ、その結果「みっともない」「具合が悪い」という古代中国語には見られないニュアンスが生まれた。「不都合」という客観的な状況評価より「みっともない・具合がわるい」という主観的評価のほうがより感情移入しやすいと考えられる。

また、「不便」の直前における副詞の使用も特徴的である。中国基本古籍庫で「不便」をキーワードとして検索した場合、37042例あるが、「極不便」をキーワードとして検索した場合、わずか27例しかない。「太不便」をキーワードとして検索した場合は、3例しかない。

③ 表現環境が「不便」の意味変化と相互作用すること

「不便なり」は単純に状態を表す一方、「不便にする」には動作・作用の意味が生じ、具体的な文脈では「かわいがる」という意味を表す。なお、この問題についての詳細な考察は今後の課題にしておきたい。

④ 新しい意味項目が生じても古い意味項目と長期にわたり共存すること

同じ中世という時代でありながら、漢文体や変体漢文体では「不便」の原義「不都合」が用いられたまま和文体では転義の「かわいそう・気の毒」が主な意味になった。さらに、和文体では「便」の否定としての「便なし」「便あし」は「不都合」の意味を表した。

⑤ 和語体系を補うことに「不便」が和文体に融合した一因が存在した可能性がある

「不便」の類義としての「不都合」の初出例は室町中期であり、「かわいそう」の初出例は室町末期であることから、中古では、「不都合」という抽象的な概念を表す和語は存在せず、「びん」および「ふびん」は早い時期に和文体に用いられたのではないかと考えられる。なお、類義語との関係は今後の課題にしたい。

注

- 1) 『万葉集』、『竹取物語』、『伊勢物語』、『古今和歌集』、『土左日記』、『後撰和歌集』、『蜻蛉日記』、『枕草子』、『源氏物語』、『紫式部日記』、『更級日記』、『大鏡』、『新古今和歌集』、『方丈記』、『宇治拾遺物語』、『平家物語』、『徒然草』
- 2) 前接語として副詞が多いが、ここでは「不便」の修飾語すべてを指す。
- 3) 後接語として助詞、助動詞が多いが、ここでは「不便」を修飾する語も含まれている。

参考文献

- 小林 千草 (2001) 『中世文献の表現論的研究』 武蔵野書院
- 五味 文彦他 (2007) 『現代語訳吾妻鏡』 吉川弘文館
- 張潔 (2015) 「漢語「不便」の意味変化について—日中対照言語史的考察—」 『日中言語対照研究論集』 第 17 号, P89-106
- 松尾聰著. 松尾光, 吉岡曠, 永井和子編 (2001) 『中古語「ふびんなり」の語意』 笠間書院
- 山中 裕 (2007・2012) 『御堂関白記全註釈』 思文閣出版
- 三橋 正 (2008) 『小右記註釈 長元四年』 (上下) 八木書店
- 宮島達夫ほか (2014) 『日本古典対照分類語彙表』 笠間書院
- 山中裕 (2009) 『御堂関白記全註釈 長和五年』 シナノ